30449
教科書文庫
3
810
31-1886
25000
28322
M19
1886

TiA2
1E87
Ta33

文部省檢定濟

廣島大学 東雲分校 図書之印

普通讀本四編下

高橋熊太郎 編

登録番号 28322
分類 375.98 T

第一課 産業

耕耘、天然、増殖、維、原料、肥沃、瑞穂、渾、嘉穀、筏、釣、網、介、捕獲、海藻、

人ノ産業ハ種々ニ分ルト雖モ、農漁工商ヲ尤モ多シトス。今次ニ此四ツノ産業ヲ略記スベシ。農業トハ田圃ヲ耕耘シテ、五穀、蔬菜、果實等ヲ培養シ、或ハ牛、馬、羊、豚、鶏等ヲ

畜ヒ、又樹木ヲ山林ニ植ウル等、總テ天然ノ産物ヲ増殖スルコトヲ務ムルモノニシテ、此業ヲナス人ヲ農夫ト云フ。　農業ハ、人間生命ヲ維グノ食ヲ供シ、其寒暑ヲ防グ、衣服ノ原料ヲ給スルモノナルガ故ニ、世界何レノ國ニテモ、之ヲ必要ノ業トシテ務メザルモノナシ、殊ニ我ガ日本國ハ、氣候温暖、地味肥沃ニシテ、尤モ米穀ニ適スルヲ以テ、古ヨリ其産多ク、瑞穂ノ國ト稱シテ、渾テ農業廣ク行ハレテ、嘉穀ヲ出スコト夥シ。　漁業トハ、河海、湖澤ニ船筏ヲ浮ベテ、或ハ釣シ、或ハ網シ、又ハ水中ニ潜入シテ、魚介ヲ捕獲シ、海藻ヲ採收スルコトヲ務ムルモノニシテ、此業ヲナス人ヲ漁夫ト云フ。　我ガ國ハ、四方海ニ濱シテ、水産ニ富メルガ故ニ、沿岸及ビ島嶼ノ居民ハ、大半漁業ニ從事セザルモノナシ。

第二課　前課ノ續

修。鑛山。採堀。製煉。填補。運搬。轉輸。

工業トハ、吾人ノ常用スル、凡百ノ器具、物品ヲ製シ、衣服、船車等ヲ作リ、家屋ヲ建ツルヲ首トシ、道路、橋梁ヲ修メ、鐵道、電線ヲ設ケ、其他、金銀、銅、鐵、石炭類ヲ鑛山ヨリ採堀シテ、製煉スル等ニ至ルマデ、概ネ天然産ニ、人工ヲ施スコトヲ務ムルモノニシテ、此等ノ業ヲナス人ヲ職工ト稱ス。　商業トハ、農業、漁業、工業等ニヨリテ産出スル諸物品ヲ、諸方ニ運輸シテ賣買スルコトヲ務ムルモノニシテ、其遠ク外國ト賣買スルヲ、通常貿易ト稱シ、渾テ此等ノ業ヲナス者ヲ商人ト云フ。畢竟、内國ニハ賣買ト云ヒ、外國ニハ貿易ト云フモ、本ト此ニ有ル所ノ物ヲ以テ、彼ニ無キ所ヲ塡メ、彼ニ餘ル所ノ物ヲ移シテ、此ニ乏キ所ヲ補フノ謂ヒニシテ、商人ハ、即チ其運搬、轉輸スル間ニ居リテ、其手數料ヲ收ムル者タルニ外ナラザルナリ。

第三課　砂漠の舟。

砂漠。際限。焦。射。苦悶。飢。由。晦冥。艱難。輿。駱駝。異名。

亞細亞と亞非利加との内地まい、砂漠多し。こゝは砂漠と云ふ處い、際限もなき砂原にて、固より人家もなく、樹木もなし。日光炎々として砂を焦くときは、其熱面を射て苦悶耐へ難し、飢うるも食を得ること能はず、渴もるも飲を求むるゑ由なし。時ありて

は怒風砂を卷きて、天地も爲めに晦冥となり、人其下ま埋められることあり、こゝは地を渡る旅客の艱難想ひやるべし。然るども幸に「オーシス」と名くる肥沃の小土ありて、其狀海中ま島あるゞ

如く、此ゝハ樹木も茂り、泉も湧き出でゝ、大に旅客の疲勞を慰むべし。　茲にこ弘地を過ぐる乃旅客を載せるものあり、舟ゝあらず、車ゝあらぢ、馬にのらず又輿ゝもあらぢ、即ち駱駝と名くる獸なり、故に駱駝を異名して砂漠の舟と云へり。

第四課　前課ノ續

體軀。構造。足蹠。膝。胸。椅褥。跪。鼻孔。胃。水胞。肉峰。剩餘。資。騎乘。

駱駝ハ體軀ノ構造、自ラ砂漠ヲ過グルニ適シ、足蹠ハ扁平ニシテ厚皮ヲ被リ、砂上ヲ歩スルニ便ナリ、膝及ビ胸部ニハ、椅褥ノ如キモノヲ具ヘテ、跪クトキハ其上ニ坐ス。　鼻孔ハ自由ニ開閉シテ、風砂ノ入ルヲ防グベク、胃ニハ水胞アリテ、巨量ノ水ヲ容ルベク、背ニハ肉峰アリテ、養分ノ剩餘ヲ貯フベシ。性柔順ニシテ能ク重ヲ負ヒ、且ツ飢渴ニ堪フルヲ以テ、商旅ハ皆之ヲ資シテ、或ハ騎乘

シ、或ハ貨物ヲ運搬セシム。其肉及ビ乳汁ハ、飲食ノ料トナスベク、其皮ハ革ヲ製スベシ。

第五課　象ノ話。

蒼灰色。靈敏。牽挽。

汝等嘗テ象ヲ見タルコトアリヤ。象ハ亞細亞及ビ亞非利加ニ產スル大獸ニシテ、高サ八尺ヨリ一丈ニ達シ、皮ハ槪子蒼灰色ニシテ、白色ノモノハ極メテ稀ナリ。鼻甚ダ

長ク上下左右自在ニ運轉シテ、殆ド手ノ如ギ用ヲ達ス。其牙亦頗ル長クシテ、重サ六貫目ヨリ十貫目ニ至ル、所謂象牙是ナリ。性靈敏ニシテ能ク物ヲ記憶ス、常ニ河邊ノ林中ニ棲ミ、出入群ヲ

ナス、群ゴトニ必ズ長アリ、群象皆其後ニ隨ヒ、行止一ニ其命ニ從フ。　土人之ヲ馴養シテ、騎乘、牽挽ノ用ニ供スルコト、猶ホ我ガ牛馬ニ於ケルガ如シ。　其牙ハ採リテ、諸般ノ器具ヲ製スベク、皮ハ柔韌ナレバ、亦諸用ニ供スベシ。

第六課　亞麻。

舶齎。亞麻仁油。印刷。晒。織緯。精良。無慮。壓。兩。

亞麻は麻の一種にして、近年西洋より舶齎せしもの多なり。　其實ハ搾りて多くの油を得、亞麻仁油と稱するは即ち是なり、藥用に供し、印刷の墨汁に用ひ、又家屋、船車を塗るのペンキを製もべし。　又其莖は、水に晒して纖緯を裂き、糸とし織もバ精良の布を得べし、之を亞麻布と云ふ、夏日の衣服に製して佳なり。　凡そ亞麻ハ耕作は、歐米諸國に於て盛に行なれ、油とし布とし、他國に輸出するは量最も夥し、我ガ邦に於て年々買入

る高も、無慮數十萬圓に下らず。　誠に山野を開き、無用の地を墾し、之を植ゑて其産を收め、油布等、兩ながら外國に仰ぐざるに至らば、國を利すること莫大ならん。

第七課　コロンブスノ小傳

伊太利、英邁、實驗、徵、推、以爲、慨然、跋涉、資裝、援、藉、遊說、零落、迫、壓、挫、

コロンブスハ、伊太利國ノゼノアノ人ナリ。天資英邁ニシテ、幼年ヨリ航海ノ事ヲ好ミ、長ズルニ及デ、頗ル其術ニ通ジ、屢海洋ヲ渡航セリ。　既ニシテ實驗ニ徵シ、算數ノ理ヨリ推シテ、世界ノ圓體ナルヲ悟リ、自ラ以爲ラク、地ハ圓體ナレバ、西ニ向テ航スレバ、遂ニ東ノ地ニ達スルヲ得ベシト、乃チ慨然トシテ遠洋ヲ跋涉シ、正シク其實ヲ究メント決心シタリ。　然レドモ、家素ヨリ貧ニシテ、資裝ヲ辦ズベキノ方ナケレバ、時ノ王公富人ノ援ヲ藉ラントシ、コレヨリ諸國ニ遊

說セリ。其頃人智未ダ開ケズシテ、人皆世界ハ平坦ナルモノト思ヒケレバ、敢テ其說ニ服スル者ナク、皆曰ク、若シ世界ヲ圓體ナリトスレバ、我レト趾ヲ對スル國ノ人ハ、皆倒マニ歩ミ、雨ハ地上ヨリシテ、天ニ降ラザル可ラズ、何ゾコノ理アランヤト、大ニ笑ヘリ。コロンブスハ、艱難ヲ忍ベ𪜈、之ガ爲メニ零落シテ、一時ハ飢渴ニ迫ルニ至レリ、然レ𪜈毫モ志ヲ挫カズ、飽マデ之ヲ果サントセリ。

第八課 前課ノ續

頃、明應、西班牙、王妃、天涯、渺茫、遮、幾、撫御、備、宿昔、西印度、蓋、致、

頃ハ我ガ國ノ明應元年、西班牙國ノ王妃イサベラト稱セシハ、賢明ノ聞エ高カリシガ、大ニコレヲ嘉ミシテ、新ニ數艘ノ大船ト、航海費トヲ給賜シタリ。是ニ於テコロンブスハ、大ニ素願ノ成ルヲ喜ビ、乃チ同年八月

三日ヲ以テ、西班牙ノ港パロスヲ出帆シ、西ニ向テ航行セリ。初メ數月ノ間ハ、天涯渺茫トシテ目ニ遮ルモノナク、舟子皆歸思アリ、幾ド撫御ニ苦ミ、備サニ艱難ヲ嘗メシガ、少シモ屈セズ

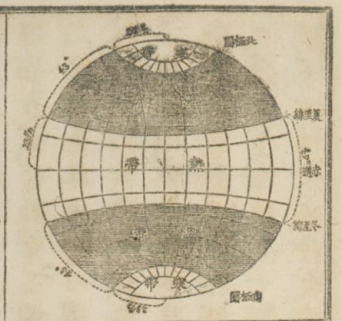
シテ、一ノ陸地ヲ發見シ、宿昔ノ志ヲ達スルニ至レリ、因テコレヲ西印度ト名ヅク、蓋シ當時知ル所ノ、印度ノ西部ナリト思ヒシナリ。後又亞米利加大洲ヲ發見シテ、永ク大名ヲ天下ニ留ムルヲ致セリ。

第九課　地球の五帶。

一圈。兩斷。赤道。夏至線。熱帶。斜射。北極。冱寒。凜冽。

地球表面の中央に一圈を畫して、南北を兩

斷す、之北圈線を名けて赤道と云ふ。赤道より南北各二十三度半の處ゟ、又圈線を施す、其北なるを夏至線と云ひ、南なる我冬至線と云ひ、此二線の間を熱帶とす。夏至線より北四十三度北處に北極圈あり、この間を北の温帶とし、冬至線より南四十三度の處ゟ南極圈あり、この間を南の温帶とす、又北極圈より北二十三度半の處、即ち北極に至るまでを北寒帶とし、南極圈ゟ南二



十三度半の處、即ち南極ゟ至るまでを南の寒帶と稱す。熱帶の地は、太陽直射の下にあるを以て、氣候終年炎熱なれども、寒帶の地は、其斜射を受け、時として、久しく太陽を見ざることあり、故に亟寒凛冽氷雪盡くる期無し、獨り温帶

は、其中間まあるを以て、氣候亦中和を得て、寒暑共に甚しからぬ、日本支那歐羅巴諸國の如きは、皆此帶まあり。

第十課 前課ノ續

椰樹。芭蕉。獰猛。虎。豹。犀。孔雀。蟒蛇。叢澤。鰐魚。逞。矮小。暢茂。樺木。杜松。苔蘚。馴鹿。

熱帶ニ於テハ、植物繁茂シ、從テ種類モ夥シク、殊ニ椰樹、芭蕉ノ類ニ富メリ、其動物ニハ軀幹ノ巨大ナルモノ、及ビ性情獰猛ナルモノ多シ、即チ獸類ニテ大ナルハ、象、河馬、駱駝等トシ、猛惡ナルハ、獅、虎、豹、犀等トス、鳥類ニテハ巨高ナルコト、駝鳥ノ如キアリ、美麗ナルコト孔雀ノ如キアリ、又深林ニハ蟒蛇アリテ、間、人ヲ害シ、叢澤ニハ鰐魚アリテ、往々狂暴ヲ逞ウス、實ニ飛潛動植ノ盛ナル處ト云フベシ。

溫帶ノ動植物ハ、熱帶ニ比スレバ、其數其種共ニ少ケレドモ、有用ノモノニ富メリ、其猛惡ニシテ人ニ害アルモノハ、僅ニ

熊、狼、野猪等ノ數種ニ過ギズ。寒帶ニハ動植物共ニ極メテ尠シ、植物ハ大抵矮小ニシテ暢茂セズ、樺木、杜松、苔蘚ノ類アルニ過ギズ、ソノ動物ニシテ最モ有用トスルハ、獨リ馴鹿ノミ。

第十一課　空氣。

屢、空氣、詳、包、大約、棲息、稀薄、透明、扇、觸、

汝等屢空氣トイフ語ヲ聞キツラン、然レ𪜈朱ダ何物ナルヲ詳ニセザルベシ。抑空氣

ト、我ガ地球ヲ包メル氣體ニテ、大約二十五里許ノ高サマデ漫コリ、人其中ニ在リテ棲息ス。空氣ノ人ニ必要ナルハ、猶ホ水ノ魚ニ缺クベカラザルガ如シ、サレド空氣ハ、其質極テ稀薄ニシテ、無色透明ナルガ故ニ、人常ニ目ニ視、體ニ覺エザルナリ。然レ𪜈、空氣モ積デ厚キニ至レバ色アリ、天氣晴朗ノ日、仰デ大空ヲ望ムニ、其蒼々タルヲ見ルハ、空氣ノ色ナリト云フ。且ツ夫レ空氣ハ、

常ニ體ニ覺エザレバトテ、若シ急ニ走リ、又ハ掌ヲ開テ烈シク扇ガバ、忽チ物ノ吾レニ觸ルヽヲ感ズベシ、是レ空氣ノ實體アル證ナリ。

第十二課　空氣の流動。

流動。緻密。顯象。上騰。塡。係。

空氣の流動せるを、之を風と云ふ。凡そ地球上、各地の溫度常ニ相等しからざ、寒冷なる處あり、溫暖ふる處あり。溫暖なる處の空氣は、稀薄ニして輕く、寒冷なる處の空氣は、緻密にして重し、輕きものは昇ニて、重きものは降る、而して其昇降に由りて、遺す所の空處は、まさ他より來きる空氣を以て、之を補ふ。斯く空氣の交互往來せるものは、即ち風の顯象ふり。試に廻り燈籠を見よ、燈籠内ゑ空氣は、燈火ニ熱せられて上騰し、冷氣下より代りて、其跡を塡む、此のごとく空氣の交代せる際ニ、風を起し、廻り燈籠

の羽は廻るなり。　又暖室の戸を開くこと三寸許、其上下に二つの燭火を置くときは、上燭ハ火炎外ヨ向ひ、下燭ハ内に向ふを見るべし、是き室内の空氣は、輕くして上行し、室外の空氣ハ、重くして下行し、内外相交代する証證なり。　地上に風の吹くも、亦此理ふ外ふらずして、其源因ハ皆温熱の作用ヨ係きり。

第十三課　前課ノ續

間斷。朝暮。帆船。出津。尋。吸收。放散。空隙。地嵐。

赤道直下ハ、日光直射シテ、暑熱常ニ甚シキガ故ニ、其處ノ空氣ハ、上昇シテ間斷ナシ、因テ南北兩邊ノ冷氣、此空處ヲ補ハンガ爲メニ、各赤道ニ向テ吹キ、常ニ方向ヲ一定セリ、此風ヲ名ケテ貿易風ト云フ、蓋シ昔日、帆船ノ通商ニ便ナリトセシヨリ起レルナリ。温帶地方ノ風ハ、或ハ北或ハ南、又西東等、其

變化定ムベカラズト雖モ、海邊ノ地ハ、朝暮ノ風向率子一定セリ、之ヲ海陸風ト稱シ、帆船ハ皆之ヲ以テ、入口出津ノ便トス。抑此風ノ原因ヲ尋ヌルニ、陸ハ海ニ比スレバ、熱ヲ吸收スルコト速ナレバ、之ヲ放散スルコトモ亦速ナリ、故ニ晝間日光ヲ受クル時ハ、陸地先ヅ熱シ、其處ノ空氣爲メニ稀薄トナリテ上昇シ、從テ海上ノ冷氣、其空隙ヲ充サント欲シテ來ル、卽チ入船ニ便ナルノ風ナリ。又日没スレバ、陸地先ヅ冷エ、海面ハ仍ホ暖ニシテ、恰モ冷暖地ヲ易フルガ故ニ、空氣ノ流動モ、晝間ト其方向ヲ反對ニシテ、陸ヨリ海ニ向テ吹ク、卽チ出船ノ風ニシテ、舟子之ヲ夜ノ地嵐ト唱フ。

第十四課　輕氣球。

塞子。梯子。大厦。差。須臾。輕氣球。墜落。冲浮。蔽。瓣。啓。幾出。

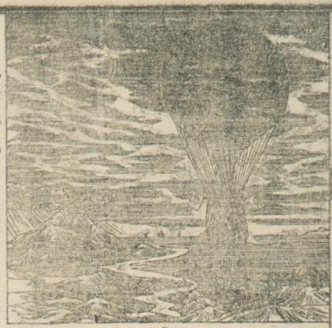
塞子若クハ、木片ヲ水中ニ推シ入レ、手ヲ放

ツキハ、復タ忽チ昇リテ、水面ニ浮ビ出ヅ、是レ水ハ、塞子及ビ木片ヨリ重キニ由レリ、即チ水下降シテ、塞子ヲ推シ上グルナリ。又試ミニ梯子ヲ、大厦高屋ノ内ニ架ケ、之ニ登リテ、天井ニ近ヅクキハ、其空氣ノ床ノ邊ニアルモノニ比スレバ、差温ナルヲ覺ユベシ、是レ温ナル空氣ハ冷ナル空氣ヨリ輕キニ由ル、即チ冷ナル空氣ハ、重キガ故ニ降下シテ、温ナル空氣之ガ爲メニ推シ上ゲラルヽナリ。人アリ嘗テ此理ヲ推考シテ以爲ラク、空球ニ充スニ温ナル氣ヲ以テセバ、善ク之ヲシテ、空中ニ飛揚セシムルヲ得ベシト。

是ニ於テ、紙或ハ絹ヲ以テ空球ヲ作リ、一ノ孔ヲ設ケ、其孔ヲ下ニ向ケ、燈火ノ上ニ支ヘテ、球ヲ燒クニ至ラザラシム。須臾ニシテ燈火ノ熱ニ由リ、球内ノ空氣温ヲ加ヘ、從テ輕クナルニ由リテ、球ハ自然ニ高ク空中ニ騰飛シ、燈火滅スルニ至ルマデ、復タ下ル

コトナシ、是等ノ球ヲ名ケテ、輕氣球トハイヘリ。其後球ノ製ヲ大ニシ、殆ド家ノ如クナルモノヲ作リ、其下ニ籠ヲ懸ケ、人ヲ其中ニ坐セシムベクス。因テ豪ヲ以テ火ヲ焚キ、即チ球内ノ空氣ヲ甚ダ溫ナラシメ、以テ人ヲ乘セテ高ク空中ニ昇リ、雲ヲモ凌グニ至ラシム、其人降ラント欲スルトキハ、火ヲ滅スレバ、球内ノ氣漸ク溫ヲ失ヒ、氣球從ヒテ徐々ニ地ニ落ツ。既ニ一人ノ輕氣球ニ乘

シテ、空ニ騰レリトイフコト、忽チ四方ニ傳聞スルニ及デ、輕氣球ヲ放チ、空中ニ飛遊セント企テシモノ甚ダ多シ。然レモ、空氣ヲ熱スル爲メニ、火ヲ用ヒタルガ故ニ、往々誤テ球ヲ燒クコトアリ、斯ノ如キ時ニハ其人絶高ノ所ヨリ、地ニ墜落スルヲ以テ、復タ生命ヲ全ウスルモノナシ。因テ更ニ工夫シ、遂ニ球ヲシテ浮輕ナラシムルノ、良法ヲ發明スルニ至レリ、其物ハ即チ石炭瓦斯ニシ



テ、甚ダ輕キヲ以テ、之ヲ大球ニ充タストキハ、能ク二三人ヲ乘セ、空中ニ沖浮スルニ足レリ。人往々輕氣球ニ乘リテ、高ク雲外ニ出ヅルコトアリ、此際ニ上レバ、空氣甚ダ稀薄ニシテ、氣息ノ苦悶ヲ覺エ、殊ニ寒冷甚ダシケレバ、氣球屢雪ニ蔽ハル、コトアリ。若シ球ヲ降サント欲スルトキハ、繩ヲ引キテ、小寛ヲ密閉セル瓣ヲ開キ、多少ノ瓦斯ヲ洩出スルナリ。

第十五課　林中の返響。

獨吟。停。四顧。隻影。嗚呼。誰。某。嘲弄。痴漢。鞭。返響。震搖。宜。

少年あり、一日林間に遊歩し、行、獨吟せしに、林中亦人ありて相和するが如し、少年異さ歩を停めて四顧せるに、絶て隻影なし、再び

吟ぜきば、林中復さ吟聲あり、試みに鳴と呼ぶ、林中同じく鳴と應ふ。少年は益異ミ、汝は誰れぞと曰ふ、林中又汝い誰れぞと答へり。少年曰く、吾は某なり、林中亦曰く、吾い某なり、少年曰く、汝何ぜぞ吾を嘲弄する、林中亦曰く、何ぜれぞ吾を嘲弄すると。

少年い大に怒り、大聲ま呼で曰く、痴漢吾今汝を鞭つべし、林中曰ふ所亦相同じ。是ま於て少年い甚ぞ恐怖し走りて家ま歸り、具さま父に告げゝきば、父曰く、これ返響と云へるものなり、居れ汝に其故を語らん。試に池中ま石を投じて、波立としむれば、波は必ず輪をふーて四方に進行し、岩石等ま觸るゝを俟て、再び返動を見る者なり、林中の聲も亦此理に異ならぬ、初め汝の聲は空氣に震搖を起せり、これ震搖直に進行して、樹木等の固體ま觸れ、爲めに再び返りて、汝の耳ま入りたるもれなり、故ま汝の聲と相

同じきを聞く、固に宜なり。　然れども我と物との間、甚だ近ければ、其返響は吾の發聲と、同時ま耳に入るが故に、之を辨知もる能はず、又甚だ遠ければ、震波消滅して、耳に入るに由なし。　少年い之を聽て、始めて心を安んじ、今は暇日毎に林間に入り、却て其返響を聞くを樂ミとせしとぞ。

第十六課　雲ノ形狀。

凝聚。遍。湯氣。層雲。山脈。起伏。掩。

春ノ日ノ麗カナルヲ遮リ、秋ノ月ノ朗カナルヲ隱スハ、皆雲ナリ、此雲ハ元ト何ニヨリ起ルカ。　雲ハ水氣ノ凝聚シタルモノナリ、太陽先ヅ光ト熱トヲ放チテ、遍ク地上ヲ溫ムレバ、河海池沼ノ水、則チ蒸氣トナリテ發散スルコト、鐵瓶ヨリ湯氣ノ發スルガ如シ、此水氣ハ常ニ空氣中ニ混ズレドモ、目ニ見ルヲ得ザルガ故ニ、人之ヲ知ル無キナリ。　然レドモ、一旦輕暖ナル空氣ト共ニ、高ク空ニ昇

リテ、寒冷ノ氣ニ遭ヘバ、忽チ凝リ聚リテ、始テ見ルベキ物トナル、コレ卽チ雲ナリ。雲ニハ種々ノ形狀アリ、卷雲トテ其形白キ羽毛ノ如ク、又ハ網ノ如クニシテ淡キモノアリ。積雲トテ煙ノ如ク、又雪山ノ重ナルヲ見ルガ如キモノアリ。

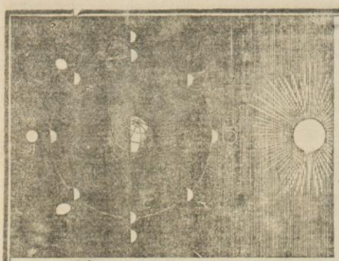
層雲トテ夏日地平ニ起リテ、山脈ノ起伏セル如キアリ。其亂雲ト名クルハ、極メテ濃キ雲ニシテ、始メテ起ル片ハ、藍黑色ナレドモ、忽チ中天ヲ掩ヒテ、淡黑色トナリ、遂ニ雨ヲ降スモノナリ。

第十七課　月ノ盈虧。

盈虧。宵。衛星。鏡。映。彰々。箭。

晝ヲ照スハ日ニシテ、夜ヲ照スハ月ナリ。月ハ雪花ト並ベ稱シテ、人ノ愛賞スルモノ

ナレ氏、始終盈虧アリテ、滿月ノ明宵アルカト思ヘバ、無月ノ暗夜トナリ、人ヲシテ常ニ輪光ヲ取ルノ愉快アラシメズ、今其由ヲ語ルベシ。



月ハ略一ケ月ニ一回、地球ノ周圍ヲ旋ル一ツノ衛星ニシテ、形ハ日ト同ジク圓體ナレ氏、固ヨリ自己ニ光ヲ放ツモノニアラズ、其光

明ヲ見ルハ、日ノ光ヲ受ケテ、之ヲ反射スルニヨルナリ。暗室ノ鏡ハ、物ヲ照サヾレ氏、之ニ燭火ヲ映ゼバ、忽チ彰々タルヲ見ルベシ、月ノ光モ亦此理ニ外ナラザルナリ。前圖ヲ見ヨ、月ノ半面日ニ向フ處ハ、常ニ光アレ氏、元來月ハ一ケ月ニ一回地球ノ周圍ヲ旋ルコト、箭モテ示ス如クナルガ故ニ、其光面ノ吾人ニ對スル時ト、對セザル時トアリ、是レ滿月、無月アル所以ナリ。又無月ヨリ

滿月ニ移ル間ニ、其光面ノ僅ニ現ハルヽ時アリ、半バ見ハルヽ時アリ、或ハ半面ヨリ多ク見ハルヽ時モアリ、斯ク月ハ盈虧ニヨリテ、種々ノ形ニ見ユレ共、月ノ本體ニハ、毫モ變化アルニアラザルナリ。

第十八課　三界の答詞。

距。普魯西亞。隆運。巡遊。臨幸。忝。疎。后。竢。鸞輿。會釋。躬。宸衷。憚。纔。敏慧。

今を距ること百三十餘年前、普魯西亞國のフレデリック大王と稱せしは、當時歐洲に於ても、賢明の聞え高く、普國今日の隆運を開きさる君にして、深く心を學事に用ひられたり。嘗て國内を巡遊して、一の小村に至りしに、村民ハ臨幸の忝きを喜び、旅情を慰め、君恩に報い奉らんとて、饗應頗る疎かならば、村童も舉りて、我が后を竢つの歌を唱へて、鸞輿を迎へとる。やがて大王ハ、村内の學校に臨まれ、子弟勉學の狀を觀て、甚ど

喜びたまひ、教師に會釋ありて、親く生徒を試みんこと我望まれ、先づ案上の蜜柑一を取て、生徒に示して仰せらるゝふこと此物い何界に屬するぞ。　時に一人の少女、徐に進みて、植物界に屬せりと答ふ。　大王又懷中より、金貨を出し示して、是い何界に屬するぞと問ふ。　少女輙ち鑛物界に屬すと答へ奉る。　是に於て大王躬ら玉體を指し、朕い是何界に屬すると問ひ、宸衷暗に必ず動物

界に屬さと答ふるならんと思料し給へり。

然るに少女は、默して答へ奉らず、其意實に國王を指して動物に屬さと云ふい憚りありと思ひ煩むーなり。　大王面を和らげ、重ねて問ふて宣はく、我が愛さべき少女、汝答ふること能はぬるや。　少女は大王の慈顏と、溫言とに心を取直し、纔に仰ぎ唇を開き、大王は蓋し天界に屬せりとぞ答へ奉る。

この時大王は少女の敏慧忠誠に出とる

答に感喜して、兩眼ゝ涙を浮べ、手を少女の首ゝ加へ、今天朕に許せゝ天界に屬せべきを以てせりと、仰せらるさり。

第十九課　鐵道ノ勇少年。

矮。痣。醜。冠。蓬。態。繕。栗鼠。衣裳。荒。倩。金剛石。磨。見榮。石塊。

アンヂー、モーアト呼べル小兒アリケリ。身ノ長矮クシテ顔ニ痣サヘアリ、醜キ田舍童兒ナリ。帽子ハ冠ル時モアリ、又冠ラザルコトモアリテ、頭髮濃ク蓬ノ如ク生エタレバ、帽子ハ用ヒザルモ、風ニモ感ズマジ、日ニモ負ケマジトゾ思ハレケル。此兒身ノ態ナドハ、少シモ取繕ハズ、サレバ栗鼠ヲ捕ヘ、鳥ノ巢ヲ探ルコトニハ慣レタレドモ、衣裳ノ流行ナドハ、オサ〳〵知ラデアリケリ。

トラハツ

アンヂーガ家ハ、丘ノ側ナル荒レ果テタル小舍ニシテ、丸木ト泥ヲモテ造リ、窓ハ孔ヲ穿チタルノミ、見ル影モナキ有樣ナリ。

サレバ斯ル泥小舍ニ住ム、哀レナル田舍童兒ノ、爭カデ人ノ手本ト爲ル所業アランヤト、惟ミタマフ人モアルベシ。　サレド退イテ倩考ヘ見ラレヨ、金剛石ノ貴キモ、磨キテ玉トナサズリセバ、唯是一個ノ見榮モナキ石塊ナリ、アンヂーニハ裂ケタル衣ノ下ニモ、貴ブベキ勇士ノ精神ヲ蓄フルヅカシ。

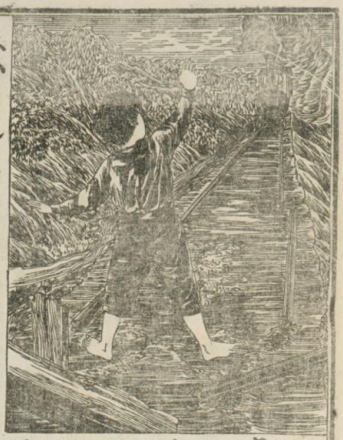
第二十課　前課ノ續

轟。軌道。齡。兼。覆。響。方便。

アンヂーガ父ノ住居ニ近ク鐵道アリ。　此小兒モ常々機關車ノ黑キ煙吹キツヽ、谷間、小山ヲ轟カシテ、勢ヒ狂フガゴトク、馳セ來ルヲ眺メ居タルコトアリ。　此小兒一日鐵道ノ上ヲ通リケル二、軌道ノ損ジ居タルヲ見出シタリ、齡尚ホ幼ケレバ、固ヨリ鐵道ノ事ナド、多ク辨ヘ知ルベキ樣ナシ。　サレド軌道ノ實ニ損ジ居ルハ、マノアタリ見ル所ニシテ、兼テヨリ鐵軌ノ外ヅレ居タル爲メ、

汽車ノ覆リテ、大ナル害ヲ被リシ事アリナド、小耳ニハサミ居レリ。恰モ此時遥ニ響キ聞エワタリテ、列車ノ來レルニ疑ヒモナケレバ、サテ其身ハ幼キ小兒ナレ氏、如何ニカシテ車ヲ止ムル方便モカナト、思案シケルガ、近キニ別ニ人モアラ子バ、自ラ止メザレバ止ムル人ナシ、イデ我自ラ之ヲ止メテクレント、膽太クモアンヂーハ、獨リ心ヲザダメケリ。

アンヂーハ、其身列車ノ爲メニ、



ヒキ殺サル、危險アランコトニハ、少シモ心ヲ留メズ、直ニ軌道ノ中央ニ進ミ、破レタル鐵軌ノ邊リニ、小ナル手ヲ開キツ、、身動キモセズ立タリケリ。

第二十一課　前課ノ續

汽笛。大磐石。据。碎。婦女。抱。紳士。妻子。顧。蔭。歎賞。財布。贈。禮。述。所在。精神。

列車は漸く進を來りて、近くなるまゝに、音も愈烈しくなり、車の上なる機關士は、又遥まで一人の小兒が、鐵道の上に立てるを見て、大に驚き、急まで汽笛を鳴らして、外に出よと知らせけれども、アンヂーは一寸も動かず。

汽笛再び聲を烈しくしなれども、アンヂーは大磐石を据ゑたる如く、一向耳まも留めざりけり。　さきに機關士もせんすべなく、其儘車を止めたり。　機關士は直まに車より跳び下り、アンヂーの方に走り向ひ、斯る妨げふて手間取り、汽車の後きたるを甚ど怒りけるが、既まして此膽勇ある小兒の爲めに、己れが命も、乘客の命も助けられたるを知りしかば、怒りは忽ち解けて、喜びと變りぬ。　車中の人は、皆何事やらんと立ち出

で見るべ、こは如何に、若しアンヂーが車を止めざりせば、列車い忽ち險しき阪を落ち降りて、碎け散りなんも計をとて、膽をむやし驚かぬはなかりけり。　婦女子は、走りてアンヂーを抱きさすりて喜び泣き、紳士は、互に妻子を顧み、此兒の蔭にて、皆無事こそ得ときとて、歎賞の聲あばしい鳴りも止まざりけり。　乘客皆々財布を取り出し、夥多の金錢を寄せ集へて、アンヂーに贈りけり。

是れアンヂーが功の賞とせしまいあらば、金錢如何に貴きも、命に代ふるの報といなし難し、然るべ口にては、禮も述べ盡せねべ、斯くして萬分一の誠をも表もしたるなるべし。　アンヂーが、斯く勇ましき業を爲してより、早十五年にあまり、若し其所在を知らまく思ふ人ならば、告げまゐらせん、彼は今其鐵道の機關士となりて、三歲兒ノ精神百までの譬に洩るべ、深沈、勇果の人とぞ聞

元々ヨリ。

第二十二課　山林ノ説。

自餘。器什。調設。凋瘦。凶歉。斧斤。樅。栂。槙。檜。

山林ハ國ノ材源ナリ、朝夕薪炭ノ料モコレヨリ生ジ、造家、築屋ノ材モコレヨリ出ス、自餘、日用器什ノ製造ヨリ、飲食、膳具ノ調設ニ至ルマデ、總テ資ヲコレニ仰ガザルハナシ。若シ山林、凋瘦シテ木材盡クルニ至ラバ、百工業ヲ營ムコト能ハズ、食アルモ製シ難ク、寒ニ遇フモ防グニ由ナシ、其窮苦ハ米穀ノ凶歉ニ讓ラザルベシ、サレバ孟子ノ言ニモ、斧斤時ヲ以テ山林ニ入ラバ、材木用フルニ勝フベカラズト云ヘリ、山林ヲ養フノ法、豈ニ忽ニスベケンヤ。

山林樹木ノ種類多シト雖モ、之ヲ大別スレバ、針葉樹、濶葉樹ノ二種ニ出デズ、就中我ガ邦ノ氣候地質ニ適當シテ、最モ能ク生長スル者ハ、針葉樹ニシ

テ、殊ニ松、杉、檜ノ三樹ヲ最トス、建築ノ用材ハ、首ニ此三樹ニ資リ、樅、梅、ヒバ、槇、サハラ等之ニ亞グ、又濶葉樹ノ有用ナルハ、櫟、櫧、ブナ、樺、楢、櫟、ハンノキ等ニシテ、或ハ家屋、船車、器具等ヲ作ルノ材トナシ、或ハ專ラ薪炭ノ料トナス。

第二十三課　松樹ノ説。

幹。盤踞。一苞。析。腐敗。柴。翠。鈍。彈力。

松ハ針葉樹ノ一ニシテ、其種類頗ル多ケレ

ド、材料トシテ最モ便益ナルハ、黑松、赤松ノ二種トス。　黑松ハ俗ニ雄松ト云ヒ、其幹或ハ直立シ、或ハ盤踞シテ枝四出シ、葉ハ一苞ヨリ二針ニ分レテ、色常ニ緑ナリ。　春初花開キテ實ヲ結ビ、實ノ形鱗ヲナシ、次年ノ秋季ニ至リ、此鱗析ケテ子落ツ。　其材ハ白色ニシテ、中心淡紅ヲ帶ビ、質堅ク脂多クシテ、能ク水濕ニ耐フ、故ニ効用極メテ廣ク、以テ諸器械ヲ作ルベシ、其脂ハ採リテ物ニ塗レ

バ、能ク其腐敗ヲ防グ、又材用ニ堪ヘザルモノハ、薪柴トナスベシ。　赤松ハ俗ニ雌松ト稱シ、形狀性質大抵雄松ニ同ジ、但其外皮ハ赤色ヲ帶ビ、葉ハ翠綠較淡クシテ、針尖亦鈍ナリ。　材ハ淡赤ニ微黃ヲ帶ビテ彈力アリ、黑松ニ比スレバ、品質優レルヲ以テ、其價モ亦貴シ、其木理ノ美ナル者ハ、室内裝飾ノ料ニ供フ。

第二十四課　杉樹の說。

霄。凌。緒。累。重。稠。鈴。神代杉。潰。朽。韻致。好事家。

杉も亦針葉樹の一にして、其用最も廣し。其幹直立して、大なるは高く霄を凌ぐ氣勢あり、皮ハ緒色にして層々累重し、枝ハ四出して稠げく、葉ハ短くして針狀を爲し、其色綠なり。　春初花と同時に實を結びて、其狀恰も小鈴の如し、此實熟するに及で、折々て子落つ。　材の淡赤にして香氣强く、脂最も多くして堅き質なるを、俗に赤杉と呼び、白

色にして脂少く脆き質なるを白杉と云ふ。

總て杉は木質軟ぎて、其量輕く、斧斤を施すも、運搬するにも、共に便ぎして、且つ能く水濕に耐ふるを以て、家屋、船艦、橋梁の材より、日用器具の料ぎ至るまで、其用に上らざるはなし、又其皮ハ屋ぎ葺きて久しきぎ耐ふ。　世人の神代杉と稱するも、杉ハ永年土中ぎ埋没して、潰朽せざるえのなり、其色黒くして香氣烈し、木質頗る韻致あるを以て、好事家ハ往々其價の貴きを厭ま、器具に作りて珍重せり。

第二十五課　檜樹ノ説。

直挺。斜。疊積。鱗次。香芬。潔白。鑿。腐蝕。繩索。炬。克。星霜。支。專門。

檜樹ハ、日用諸材中ノ最良ナル者ニシテ、亦針葉樹ノ一ニ屬ス。　幹直挺シテ高キハ十數丈ニ達シ、圍リ二丈ニ餘ルモノアリ、皮淡黒ニシテ赭赤ヲ帶ビ、枝ハ密生シテ斜ニ地

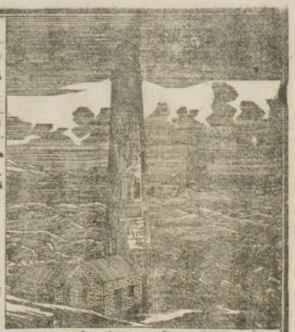
ヲ指セリ、葉ハ扁小ニシテ疊積鱗次シ、四季共ニ翠然タリ、春初、花ヲ着ケ實ヲ結ブ、其形杉ノ實ニ似テ小ナリ。　材質硬軟宜シキヲ得テ、工作ヲ施シ易シ、木理直達シ、膚色潔白微シク黄紅ヲ帶ベリ、其斧鑿ノ痕滑カニシテ清白ナルヲ以テ、多ク神殿等ヲ造ルニ用フ、且ツ最モ腐蝕ニ耐フルガ故ニ、凡ソ船艦、橋梁ヨリ、家什器具ニ至ルマデ、用ヒザル者ナシ、又製シテ繩索トナシ、編デ笠トナシ、織テ席トナシ、其他薪炭炬火ノ料トナスベシ、特ニ其皮ハ、屋ヲ葺クニ、外觀甚ダ佳ニシテ、克ク數百年ノ星霜ヲ支フルト云フ。　凡ソ檜ヲ以テ器具ヲ製スル工人ヲ、古來檜物師ト云ヒテ、專門ノ職業ヲナセリ、亦以テ檜材ノ用廣クシテ、邦人ノ貴重スル所以ヲ見ルベキナリ。

第二十六課　燈明臺。

燈明臺。目標。凹凸。暗礁。政府。洶岬。磯。干潮。排

除。疑懼。四轉光。

燈明臺ハ、船舶往來ノ目標トナリ、之ヲ保全スルニ、必須缺ク可ラザルモノナリ。若シ暗夜ニ風烈シク、船海岸ニ近ヅク時ニ當テ、燈明臺ナカリセバ、覆没、破壞ヲ免レザルベシ。我ガ邦、西北ハ日本海ニ濱シ、東南ハ太平洋ニ臨ミ、周圍皆水ニシテ、海岸凹凸出入シ、無數ノ島嶼其間ニ散在シテ、暗礁ノ如キモ、亦少シトセズ、故ニ航海ハ頗ル困難ナリ



トス、我ガ政府、毎年巨額ノ資ヲ投シテ、燈明臺ヲ設置維持スルハ、洵ニ是ガ為メナリ。燈明臺ハ石、煉瓦、若クハ鐵ヲ以テ之ヲ築ク、其地位ハ、概子岬磯岩礁ノ上ニアルヲ以テ、苔蘚滑ニシテ怒濤之ヲ洗ヒ、往々終日ノ中、水ヨリ出ヅルノ間、干潮數刻ニ過ギザルモ

ノアリ、サレバ初メ未ダ建タザルノ前ニ見レバ、其成功殆ド期シ難キノ懷アラシム。然レモ人智ノ巧慧ナル、工術ノ進歩セル、能ク此等ノ困難ヲ排除シ、今ヤ燈明臺ハ、如何ナル場所ニモ、建築シ得ルニ至レリ。暗夜ニ風烈シク、殊ニ海岸ニ向テ吹ク時ハ、船ニ在ル人皆疑懼自ラ安ンゼズ、徘徊四顧燈明臺ノ光ヲ望ムニ及ンデ、心始メテ坦カナリ。

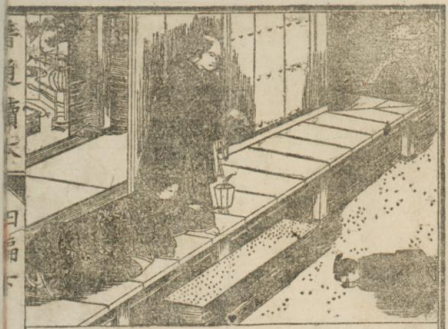
是時船長時計ヲ取リ出シテ、之ヲ觀察スルコト須臾ニシテ、輙チ曰ク、彼ハ回轉光ナリ、其回轉スルコト、何分時ニ一回ナリ、余ハ彼ノ光ノ何タルヲ知リ、亦余輩ノ所在ノ何地タルヲ知ルト、誠ニ是レ航人、船客ニ至便ナルモノト謂フベシ。

第二十七課　松平信綱ノ話。

伊豆守。松平信綱。甫。德川秀忠。便室。擔。雀。巢。衆。忙。尋。詰責。救解。縱。良輔。天草。慶安。獄。

伊豆守松平信綱は、幼名を長四郎と云へり。

年甫めて十一、將軍德川秀忠に召されて、世子竹千代に給事せり。　或る時竹千代、父將軍の便室社樶に雀の巢を作るを見て、長四郎に命じ、往きて雀兒を捕へしむ。　信綱夜ふ乘じて屋に升りけるが、脚を失して地に墜ちぬ。　秀忠其響きを聞き、驚き起ち刀を提げ、夫人をして燭を秉らしめ、出でゝ見るに信綱あり。　信綱忙しく容を改め、地上に拜伏せり。　乃ち其來由を尋ぬるふ、臣



晝間御殿の樶に雀兒の巢に在るを覩、心に愛して忘るゝこと能はず、今來り竊に捕へんとせしなりと答ふ。
秀忠まと誰か之を命ぜしえのあらんと問ふに、臣自ら己の意ふ出でゝ之をなせり、

命を受くる所なしと答ふ。秀忠仍ほ詰責せること數次に及べども、答ふること初に異なることなし。秀忠怒りてこれを捕へ、大なる囊に納れ、柱に懸けて云ふ、汝明白に言はずば出さじと。然れども信綱竟に辭を易へず。夫人爲めに救解して之を縱てり。秀忠之を目送して、夫人に語りて曰く、かれ幼なきども節に臨み能く守りて屈せざること空此の如し、後必ず良輔とならんと。

信綱長ずるに及び、果して名臣となりて、天草の亂を平らげ、慶安の獄を治め、其餘功勞舉げて數へ難し、世人稱して智慧伊豆といへり。

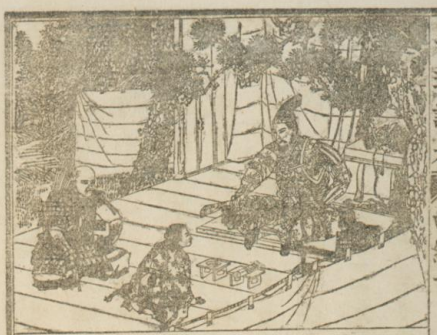
第二十八課　櫻井驛訣別。

訣別。足利尊氏。直義。遁。朝廷。楠正成。兵庫。遣。戰。正行。櫻井ノ驛。河内。誡。蹤。討死。泡。一族。徒黨。引籠。記念。湊川。血戰。憂。亡。

延元元年足利尊氏、其弟直義ト、西國ノ兵八

十萬ヲ率ヰテ、將ニ京師ニ通ラントス。朝廷、楠正成ヲ兵庫ニ遣ハシテ、新田義貞トカヲ戮セテ、之ヲ防ガシム。此時正成、ハヤ心ニ戰死ヲ覺悟シタリケレバ、長子正行ガ今年十一歳ニテ供シタリケルヲ、思フム子有リテ、櫻井ノ驛ヨリ河内ヘカヘシ遣ストテ、誡ヲ遺シテ曰ヘルヤウ、獅子ハ子ヲ産ミテ三日ヲ經レバ、之ヲ數千丈ノ谷ニ蹴落シテ、其子ニ獅子ノ本性アレバ、教ヘザルニ中ヨ

リハ子返リテ、死セザルヲタメストイヘリ、況ヤ汝ハ、已ニ十歳ニモ餘レリ、ヨク我ガ教誡ヲ耳ノ底ニ留メテ、ユメ違フコトナカレ、ソモ此度ノ戰ハ、實ニ天下安危ノ係ル所ナレバ、我マタ生キテ、再ビ汝ヲ見ルコトハカナフマジ、我既ニ討死スト聞カバ、天下ハ終ニ尊氏ノ手ニ歸セン、然レモ一旦ノ命ヲ助カランントテ、我ガ多年ノ忠義ヲ水ノ泡トシテ、朝敵ニ降リ、汚名ヲ後代ニノコスコトナ



カレ、一族徒黨ノ者、一人ニテモ生殘リテアランホドハ、金剛山ノホトリニ引籠リテ、再ビ忠義ノ旗ヲ擧ゲヨ、是ゾ汝ガ第一ノ孝行ナルゾト、泣クく言ヒフクメ、帝ヨリ賜リタル、菊作リノ刀ヲ後

ノ記念トテ取ラセ、各東西ニ別レケルガ、後正成進ミテ湊川ニ陣シ、直義ト血戰シテ、果シテ討死セリ。　嗚呼、正成敵ノ大軍都ニ近ヅクト聞キ、天下ハ必定賊ニ歸センコトヲ憂ヒ慮リ、我ガ亡キ跡マデモ、其子ヲ留メテ義ヲスヽム、比ヒスクナキ忠臣ニコソ。

ちはやぶる　あだ　討　敵　ほろぼす　ことは　なほ　木の　さとり　井　社　や。

きみ　ぞ　さめ　ちぢ　と　を　〜　へて　を　ま　つ

あらしまむのふさんら井の宿。

第二十九課　弘安ノ役。

忽必烈。范文虎。冦。鎌倉。識。執權。北條時宗。書辭。容。斬。憤怒。壹岐。對馬。掠。太宰府。犯。少貳景實。虜。實政。探題。督。部署。河野通有。奮進。殲。辟易。據。颶風。漂蕩。吶喊。殲。武威

弘安四年元朝ノ主、忽必烈、其臣、范文虎ヲシテ、兵十萬ニ將トシテ來リ冦ス。是ヨリ先、元主屢書ヲ吾ガ朝ニ送リ、好ヲ通ゼントフ。朝廷之ヲ鎌倉ニ下シテ議セシム、時ノ執權北條時宗、其書辭ノ無禮ナルヲ見、怒リテ容レズ、前後遣ハス所ノ使ヲ斬ルコト數人。元主憤怒シ、兵ヲ遣ハシテ我ガ壹岐對馬ヲ掠メ、進デ太宰府

ヲ犯ス、少貳景資出デ、之ヲ拒ギ、射テ虜將ヲ殺ス、虜軍宵逃ル。既ニシテ時宗大ニ兵備ヲ嚴ニシ、北條實政ヲシテ九州探題トナシ、將士ヲ督シテ沿海ニ備ヘシム。是ニ至リテ、虜兵大舉シ軍艦海ヲ蔽フテ來ル、實政乃チ諸軍ヲ部署シ、海陸兵ヲ合セテ大ニ虜軍ト戰フ、我ガ將河野通有、奮進シテ虜艦ニ登リ、手ニ數十人ヲ殲ス、虜兵辟易シ退テ海島ニ據ル、會、颶風大ニ起リ、虜艦漂蕩盡ク壞ル、我ガ軍勢ニ乘ジテ、吶喊之ヲ擊ツ、海水皆湧ク、遂ニ之ヲ殲ス、虜兵十萬、能ク生キテ還ル者僅ニ二人ノミ、是ヨリ皇國ノ武威益顯ハル。

第三十課　神武天皇

神武天皇。日向。高千穗。東征。瓊々杵尊。蹕。駐。西偏。僻遠。霑。邑。疆。控御。統一。甲寅。帥。攝津。長髓彦。邀。拒。攻。辛酉。朔日。大和。橿原。紀元。詔。虜。祀。靈時。鳥見山。一系。

神武天皇初め日向の高千穗にましくしが、東征を思召立ちて、諸兄及び皇子を集めて社さまはく、我ゲ天祖瓊々杵尊、蹕を此國に駐めたまむしより以來、多く年代を歷さり、然るに此西偏に都をるを以て、僻遠の地は猶ほ未ざ王澤に霑ぼ、邑に君あり村に長あり、各、土地を私有し、疆を分ちて自ら相凌げり、我れ聞く東方に美地あり、四方を控制をるに便なりと、宜しく就きて之に都し、

以て天下を統一すべし。　甲寅の年十月、天皇親ら師を帥ゐて日向を發し、西海、山陽の諸國を歷て、遂に攝津に着きたまふ。　長髓彦等の諸賊、所在兵を聚めて邀へ拒ぐ、皇軍之を擊ち、攻むれば取り、戰へば勝ち、降る者は之を撫し、背く者は之を戮し、終に長髓彦を誅し、六年の後に至て悉く中州を平ぐ。其翌々年辛酉の正月朔日、大和の國橿原の宮にて、天位に即かせたまふ。　是れ神武天

皇の元年まして、即ち我が國の紀元なり。
四年詔ありて、我が皇祖の神靈天より照臨ましくて、朕が躬を助けたまへるゑより、諸の虜どもたやすく平ぎて、天下に復さ波風社虞なし、朕は正しく天神の御子なれば、宜しく天神を祀りて、以て大ゑ孝道を申べ明のゑすべしとて、即ち靈時を鳥見山に立てさまふ。巻首ノ畫ヲ看ヨ　紀元より今茲明治十九年に至るまで、二千五百四十六年なり。抑世界各國多しと雖も、未だ千古一系の皇帝ゑして、斯の如く國を知し召すこと盛なるものはあらぬ、實ゑ仰ぐべく尊むべし。

普通讀本四編下終

小田切潭城 書
松本楓湖 畫
小林檉 刻
桑原三

明治十九年十一月四日版權免許
同年十一月出版
同二十年三月十九日訂正再版御届
同年十二月三十日訂正三版御届

定價金十錢五厘

編者 東京府平民 高橋熊太郎 下谷區竹町一番地

出版人 東京府平民 小林八郎 日本橋區通旅籠町十一番地

發兌 東京日本橋區通旅籠町十一番地 集英堂本店
栃木縣下宇都宮大工町四十一番地 集英堂第一支店
大坂東區博勞町四丁目十五番地 集英堂第二支店